

## ～ing 形起源のカタカナ外来語を考える

松浦 明

### Loanwords in Japanese Derived from English ～ing Form

MATUURA Akira

#### 《Summary》

This paper discusses loanwords in Japanese derived from English ～ing form collected mainly from Japanese newspapers and TV programs, followed by the reasons for this phenomenon, with the prospects for the future of Japanese at the end.

#### はじめに

私は長年カタカナ外来語（以下、外来語と略記）の研究をしており、それについての論考をいくつかこの研究論叢に発表してきたが、今回は英語の～ing形を起源とする外来語をとりあげる。2001年11月から2002年9月まで新聞やテレビなどから集めた例を古い方から順にならべ考察をくわえることにする。毎日新聞はM、朝日新聞はA、朝刊はm、夕刊はeと略記し、単語と単語の間には中黒をおいた。具体例のあとに、こうした現象の理由を考え、日本語の将来を論じてむすびとする。

英語の ~ing 形からきた外来語には日常よく使われるものがあり、つぎのようなものがその例である。

ウエディング、カッティング (美容など)、クッキング、タイミング、  
フィーリング、ブラッシング、ペンディング、ランキング、レコー  
ディング

スポーツの分野にはとくにこれが多く、野球はその代表格である。まず野球の例をあげ、それ以外のものはそのあとにあげる。

ウエイティング、キャッチング、スライディング、スローイング、バ  
ッティング、ヒッティング、ピッチング、  
サイクリング、ジョギング、フェンシング、ボクシング、ランニング

私がこの論考でこうした ~ing 形起源の外来語をとりあげようと考えた最大の理由は、毎日外来語の例をあつめていて、ハッとさせられるような例、もっといえば、外来語のレベルもここまできたのかと思わざるをえない例にぶつかることがさほどめずらしくなくなったからである。以下そのような例を列挙していく。

- (1) 11月8日のテレビ番組でライティングの調整といているのを耳にしたとき、writing をカタカナにしたのかと思ったが、どうやら照明 (lighting から) を意味しているように推察された。はじめての例。
- (2) 11月13日 Me に日本エイジング・メール (加齢男性) 研究会設立の記事がのっていた。
- (3) 11月25日のテレビの広告の文字にコンサルティングとあった。コンサルタントのほうが一般的である。
- (4) おなじ日のMmの見出しにWブッキングとあり、記事の文章は『二また』かけて仮予約となっていた。
- (5) 12月12日のテレビでウエイティング・リストとアナウンサーがいているのを聞き、すぐにはわからなかった。ノーベル賞を受けるのをまっている人々のリストのことで、こういうウエイティングの使いかた

ははじめてだった。野球では、バッターが打たずにまつことを意味するが、ここに外来語の意味の拡大現象がみられる。ほかの例としては、クリーニングがあげられる。もともとは衣服のクリーニングにかぎられていたものが、このごろはハウス・クリーニングという表現もめずらしくなく、風呂釜クリーニングという広告さえある（6月16日のスポーツ・ニッポン）。スポーツで使うトレーニングにもおなじように意味の拡大がみられ、メンタル・トレーニングなどという表現がうまれた。

- (6) 12月18日のMeにピアッシングという表現を見つけ、びっくりした。もちろんはじめてみる例で、外来語もここまできたのかと感慨をあらたにした。ピアスはめずらしくないが、その動詞の動名詞形がカタカナで表現される時代になったのか、と。もう1つびっくりした例だが、あるテレビ会社で出している雑誌にピーリングという表現を見つけ意味がわからなかった。シミやシワのある古い角質を独自の技術で取り去る高度な美容法、とある。peeling をカタカナにしたものだろう。peel をカタカナにした外来語さえ存在しないというのに、一気にその～ing 形がごくふつうの書きものにあらわれるという現象には考えさせられる。
- (7) 12月25日の岩手日報mの見出しに、コンディショニング・コーチという表現があった。それを記事で、ある講演者のことばとして、「選手が最高の力を発揮できるよう、心身の状態を教育、強化、調整すること。特にメンタル面での強化が必要」と解説している。コンディショニングは、これまで化粧のことをいう場合にかぎられていた。ここにも意味の拡大がみられる。そして、この例のように、あたらしい意味がつけかわわるときにはそれを解説するのが普通である。逆にいうと、こうした解説がくわえられていることからそれがあたらしい使われかただということがわかるのである。
- (8) 12月26日のテレビの文字に、人と企業をマッチングとあった。

- (9) 1月23日のAmの記事に、ある人のことばとして、顔にペインティングもした が引用されていた。
- (10) 2月15日のAmの関西空港についての記事に、関空パッシングとあり、素通りの意味と解説されていたが、これはとくに外来語を使わなくてもすむ例ではないか。
- (11) 2月21日のテレビの文字「マーキングして」も木にしるしをつける意味で、マーキングを使わなければならない必然性を感じない。マークというごく普通の外来語から意味がわかるだろうと考えて使ったものと思われる。ここでふれておきたいのが、～ing 形からの外来語に「する」という日本語をつけくわえてあたかも～ing 形を日本語の名詞のようにつかう例がみられるようになったことである。野球のテレビ中継で、投げることをスローイングする、ボールを取ることをキャッチングするなどごく普通の表現である。キャスティングする、モニタリングする、などの例をみたこともある。ベッド・メーカーという例さえある。
- (12) 2月26日のAmの記事に、電通W杯ライセンス事務局という表現があった。
- (13) 5月26日Amの記事には(7)とおなじように解説のくわえられた文章がのっていた。公共施設でテレビ中継の映像を大画面で放映する「パブリック・ビューイング」というものである。
- (14) 6月1日のテレビで文字と音声でタッチング・プールという表現を使っていた。水の中の生物をさわれることを意味している。おなじ表現は7月27日のAmにもみられ、水辺の生き物や魚類を触ったり観察したりできる施設と解説されている。タッチという外来語はごくありふれたものであるから子どもでも理解できる表現である。
- (15) 6月8日Amの見出しに、コーチングで「自己発見」とあり、意味がよくのみこめなかった。記事には「スポーツならぬ、ビジネスのコーチが、数回の個人別セッションで、自分が大切にしていること、やり

たいことを再発見する手助けをしてくれる。『コーチング』である。」という解説がつけくわえられている。コーチというありふれた外来語の延長的用法といえよう。ただし、コーチがスポーツの分野で使われることが多いのに対し、このコーチングでは意味がひろくなっている。

(16) 7月15日のNHK・FMの音楽の番組で、オープニングとエンディングをはじめとおわりという意味で使っていた。これらの単語はおそらくオープニング・テーマ、オープニング・ゲームなどのような2語からなる表現から1語がきりはなされて使われるようになったものであろう。このような現象は日本語の基礎語彙に属する単語にもみられる。ジョギング・シューズ、バレー・シューズのように使われていたシューズがこのごろはくつの意味で使われるようになっている。近くのスーパー・マーケットではふつうの花の売り場にフラワーという表示がかかげられている。形容詞のメインは、メイン・ストリート、メイン・テーマのように使われるが、このごろはこのメインを名詞として中心の意味で使われるようになってきていることに注目したい。

(17) 8月10日のAmにメガネの広告があり、フィッティングと大きく書いてあった。その下に掛け具合の調整という日本語がつけくわえられている。さらにその下の文章には、セミフィッティング（加工時の枠入れ後の型直し）などフィッティングをふくむいくつかの表現が日本語とともに書かれている。

(18) 8月16日にはコーティングという表現に2回であった。その1つはAmの記事の文の「…紙に…ナイロンでコーティングした。」で、もう1つはテレビの音声の「金にエナメルがコーティングされた…」である。

(19) 8月22日のAmに、ある研究員の文がのっていたが、その中にダウンゾーニングという表現がみえる。ゾーンはよく使われるが、ダウンゾーニングとなると、かなりむずかしく、一般の人はほとんど理解できない。9月17日のテレビでも、音声でICについての文にこのコーティングを使っていた。

(20)なんといってもきわめつけは、9月17日のテレビによる野球中継で耳にした、ブラッシング・ボールという表現である。打者の顔の近くをせめるボールのことと解説していた。まったく聞いたことのない表現で意味がつかめなかったが、～ing 形起源の外来語もここまでくると、これからさらにこういった表現がふえていくのであろうかとやや心配にもなってくる。

## 2

それでは、このような～ing 形起源の外来語など、それもこれまで聞いたこともないような外来語が使われるようになった理由はなんだろうか。

私は大きくわけて4つあげることができると考えている。まず第1に、私が原語への接近とよんでいる現象である。多くの外来語が使われている現在、部分的に、その発音や意味などが日本で使われている英語の原語とちがったそれから英語の原語に近いそれへと修正され近づいていく現象をさす。その具体例はあとで示すが、これにはいくつかの理由が考えられる。日本人の英語志向、英語教育の普及、日本の国際化などである。たとえば、高等学校の英会話の授業で生徒が英語の単語を外来語ふうに変換して直される、英文を書く際、外来語の影響を受けて日本で使われている意味で英単語を使ってしまい訂正されるといったことがくりかえされていくと、外来語の発音や意味が英語の原語に近づいていくことになるだろう。日本人の英語へのあこがれが、日常の外来語を英語とちがった発音や意味で使うことにブレーキをかけることもあろうし、ここに日本の恥の文化が顔をだすこともありうる。

具体例をあげる。日本英語検定協会が実施している実用英語技能検定試験(通称・英検)は聞きとり試験の名称をヒアリング・テストからリスニング・テストに変えた。英語教育界全体にこういう流れは一般的になっているとみてよいだろう。その結果、外来語のヒアリングは聞きとりの意味を失って、公聴会の意味にもっぱら使われるようになりつつある。原語への接近現象のもう1つの例は、岩手県のある宿泊施設のドアに書いてあった外来語である。

このごろは、ホテルやレストランの従業員の使う部屋のドアに **private** と英語のまま書かれることが多くなったが、その岩手県の施設のドアには英語でなくカタカナでプライベートと書かれていたのである。**private** と英語のまま書くのははばかられたのでカタカナで書いたのであろうが、その表記が英語の原語の発音とはちがう外来語の発音であるところがおもしろい。ついでにいうと、ホテルのいわゆるフロントは、カタカナでフロントと書いたもの、それを **FRONT** とそのまま英語にしたもの、**RECEPTION** と正しい英語で書いたものなど、ゆれがみられるが、さすがにレセプションと書かれた例はまだみたことがない。日本ではちがった意味で使われるからであろう。国際化がすすんでいくこの時代に、英語を知っている人たちが **~ing** 形をふくむ英語の表現をそのままカタカナにして日本語の中にもちこむとしてもなんらふしぎはない。英語を学んでいる人たちがそれを正しい英語と知れば、それをそのまま英語の中に使うこともできて便利でもある。和製英語にわずらわされずにすむ。国際化に関連して注目されるのがゴールという表現である。マラソンで使われるこの外来語はこれまで現地で **GOAL** と書かれ、ラジオやテレビの中継でもこの単語を使っていた。ところが、このごろは **FINISH** と書かれ、中継でもそれをそのままフィニッシュということが多くなった。いずれマラソンでゴールという単語がきえてしまう可能性は大きい。なお、最後に1つつけくわえておきたいことがある。駅のホームのことをこのごろはプラットホームということが多くなった。これも原語への接近現象の1つであるが、その理由はおそらく上にあげた理由のほかに、ホームという外来語の意味が拡大して、マイ・ホーム、ホーム・プレートなどのほかに老人ホームのようにも使われるようになったために、ホームという単語の意味の多さをへらし、あいまいさ、わかりにくさをさけようという意識がはたらいているのかもしれない。

2番目の理由は、外来語を論じられるときによくひきあいだされるかっこよさである。これは日本人の英語志向と密接にむすびついており、テレビで日本人がうたっている歌の歌詞がカタカナや英語そのもののオン・パレードといった例もめずらしくない。このごろよくみかけるガーデニングは園芸よりハイ

カラのように思えるし、あるスポーツ・クラブの従業員は私の「水泳とスイミングとどちらを多く使うか」との問いに「スイミング」と答え、「そのほうがきこえがよいから」とつけくわえた。その施設の試着室にはフィッティングルームと書いてある。どちらでもよさそうであるが、やはり外来語の多く使われるスポーツ・クラブで試着室ではなんとなくすぐわないのだろう。さらに、おなじ施設にタンニング・マシーンというものがおいてある。タンという外来語はまだ一般的ではないが、その～ing 形をカタカナにしたものが使われるのも、同様の理由からと考えられる。その表現がわからなくとも、実物をみれば大体の察しはつくし、日本語の説明もつけくわえられているので心配は無用というわけだ。7月15日のテレビ音声で 急流くんだり、いわゆるラフティングといていたが、これもラフティングのほうがかっこよくきこえることを考えての表現とってよいだろう。8月7日のテレビ番組で、ある若者が飲食店のなかでケータリングという表現を使ったところ、中年の男が「ケータリングってなんだ」とたずねる。「出前みたいなもの」と説明していたが、かっこよさを優先すると、このようなことがおこりかねない。ケータリングの意味を知っている日本人はまだそれほど多くないであろう。

3番目は、社会がうつりかわっていくうちにあたらしい表現が必要になるという事態で、それを～ing 形をもとにした外来語であらわすことも1つの方法であろう。コンピューターのハッカーに関連したハッキングという表現を見たことがあるし、ストーキングやピッキングもこの部類に属する。私のすむ地域の自治会の回覧印刷物にはこのピッキングが使われ日本語の解説がくわえられていた。少子化高齢化社会ともなれば、(2)にあげたエイジングという表現が現在より使われるようになるかもしれない。

最後の理由は日本語にかかわっている。漢字は中国からきて長い歴史をへて日本語の中にふかく根をはったということはだれも否定できないだろう。しかし、その漢字には、もちろん長所もいろいろあるが、不便な点もあってそれがある意味で日本語のすがたをゆがめてしまっているともいえる。たとえば、漢語に同音語が多いために耳で聞いただけでは理解できないことは日常よく経験



する。そしてそのことをとくに疑問に思わない人があまりに多いことはふしぎでさえある。その欠陥をおぎなっているのが外来語ではないかと私は思っている。たとえば、つぎのくみあわせを考えてみよう。券-チケット、線-ライン、題-タイトル、点-ドット、版-バージョン、負-マイナス、欄-コラム、輪-リングのそれぞれの組み合わせの漢字には同音語があり、耳できいてわかりにくい要素をかかえている。その点、右側の外来語は、その単語を知っているかぎりなんの誤解もとまどいもなく理解できるという強味をもっている。若者たちが外来語を使いたがる傾向をなげく人がいるが、意味もわからずにむやみに使ったり知識をひけらかすために利用するのは論外としても、わかりにくい漢語をさけて1回聞いただけでわかる外来語を使う若者の感覚を私はむしろ正常であると考える。漢字には音と訓があり、送りがなやまぎらわしい漢字の使いわけといったむずかしさもつきまとう。外来語にはそのようなむずかしさがまったくない。2つ例をあげておこう。フィッシングと釣りを考えた場合、フィッシングにはなにも問題はないが、釣りが釣果となるとがぜんむずかしくなる。この単語のよみかたを知っている大学生はどれくらいいるだろう。書くときも使う漢字をおぼえておかななくてはならない。もう1つはワールド・カップについてのテレビ報道でみかけた表現である。おなじことをあらわすのに局によって表現がちがっていた。ある局はチケットング・センターといい、もう1つの局は発券センターといていた。目でみるかぎりその理解度にほとんど差がない。しかし、文字をみないで耳で聞いた場合、発券センターはわかりにくい。想像と創造を聞いて区別できるように前者をイマジネーションといいかえ、科学と化学の耳で聞いたときのまぎらわしさをさけるために前者をサイエンスでおきかえることはこのましいと私は思う。スーパー・マーケットなどで大、中、小をL、M、Sと表示するのも単にかっこいいからとすますわけにはいかないだろう。大よりLのほうが聞いてわかりやすいことはあきらかである。

### 3

以上のべてきたことをふまえてこれからの日本語のすがたを考えてみたい。

現在の日本語はたとえていえば両極端の要素をあわせもつ、いわばひきさかれたような状態にある。一方でカタカナであらわされる外来語と英語つづりの単語、そしてもう一方でパソコンでいとも簡単に打ち出せるおそろしくむずかしい漢字をふくめて多くの漢字が使われている。おそらくこの2つを両方とも理解し、使いこなせる人は少ないであろう。大まかにいえば、前者は耳で聞いてわかることばを大切にする人、後者は音声より文字を重視する人によってこのまれるとってよいのではあるまいか。国際化がすすんでいくなか、日本がほかの国との交流に背をむけて自分のカラにとじこめることはもはやできないだろう。日本語を学ぼうとする外国人も多い。そとにひらかれた日本をめざすとするならば、日本語もそれなりに日本人にも外国人にもわかりやすい言語へと変身をとげていかなければならないと思われる。外来語や英語つづりの単語の乱用によりコミュニケーションがなりたたなくなることはこのましくないが、音声を無視して文字のあそびにふけている時代でもない。若い人たちが日本語の健全なすがたをみつめ、それをそだてていこうとするとき、日本語は国際社会にふさわしい言語になっていくことだろう。

#### 参考文献

- 石野博史 『現代外来語考』 大修館書店 1983年  
石綿敏雄 『外来語の総合的研究』 東京堂出版 2001年  
楳垣 実 『日本外来語の研究』 研究社 1973年  
野村雅昭 『漢字の未来』 筑摩書房 1988年